東京帝國大學經濟學會

經濟論叢

第五十六卷第二號
昭和十八年二月

論叢
計畫の經濟理論……經濟學博士 柴田敬
總力戰體制に於ける企業者……經濟學士 大塚一朗
生產理論に於ける商品群の觀點……經濟學士 青山秀夫
時論
公債の國民負擔を輕易ならしむる方法……法學博士 神戸正雄
研究
支那工業に於ける勞働場所の諸條件……經濟學士 岡部利良
說苑
支那における繭の流通費用……經濟學士 堀江英一
附錄
彙報

說苑

支那における繭の流通費用

堀江英一

一　流通費用の概念

繭價はわが國では周知の如く「生絲一〇匁を生產するために支出しうべき繭の價格を錢單位で表現した數値」たる「掛目」、すなはち〔(繭價＋副産入)－(生産費＋手取金)〕×$\frac{1}{1600}$なる數式によつて決定される。繭および生絲の流通費用は、それが製絲家の負擔に屬する限り、上掲數式中の「生產費」に含ましめられてゐる。そこで、繭價は上掲數式の示す如く、それが基本的には絲價から製絲家の要した生產費と流通費用を控除した殘餘と見られてゐる限りにおいて、それは繭生產費とは獨立的に決定され、繭の流通費用は養蠶農家の繭販賣手取金を減少せしめる項目となる。假りに製絲家が中央市場で乾繭を購入すると假定すれば、繭生產費は乾繭價格に對しそれを規定するものとして表れず、逆に繭の流通費用がそれを規定する項目として表れ、從つて繭の流通費用が增大すればする程、養蠶農家の繭販賣手取金は減少する。これはいつ又いかなるところでも見られるところの、繭價決定における繭生產費と繭の流通費用との關係である。そこで、この關係の科學的意味が檢討されねばならない。

われ〳〵は問題を明確ならしめるため、製絲家が中央市場で乾繭を購入するものとし、そこにおける繭生產費と繭の流通費用の乾繭價格に對する關係を見ることゝする。そして、支那とくにわれ〳〵がこゝで取扱ふ揚子江三角地帶では製絲家は乾繭市場からその原料繭を購入することが多いから、かゝる取扱方法が逆つて現實的方法たりうる。

(a)繭生產費。上掲「掛目」算定數式は繭價が繭生產費から全く獨立に決定され、從つて繭生產費が繭價を

規定する項目として繭の價値形成にあづからないことを示してゐる。然し繭價と繭生産費との乖離、從つて養蠶農家の損益が繭の供給量、從つて生絲の供給量の增減を通じて絲價の騰落に影響し、かくして繭價が絲價から逆算された「掛目」によつて決定されつゝも、なほ繭生産費が繭價決定の基礎として作用する。[1]「掛目」はかゝる本質の倒錯形態である。

(b)繭の流通費用。流通費用は商品の流通過程のうちに發生する費用であつて、通例輸送費用・在庫費用・純粹流通費用・金利諸掛りなる四つの項目に分類される。ところで、さきに述べたやうに、これらの流通費用は乾繭價格に際し一率に養蠶農家の繭販賣手取金に加算され、從つて價値形成機能をもつものとして現象する。果してそうであらうか。[2]

輸送費用。商品における生産と消費との場所的乖離を克服するための輸送費用は、それが生産の本來の社會的目的たる商品の使用價値の現實化のための不可避の費用であるから、それは價値形成に參加し、それだけ價値を增大せしめる。

在庫費用。商品が生産者から消費者にわたるまでに要する一定の時間、商品を保管する費用が在庫費用である。ところで、この在庫費用のうち、生産物の物質的性質や再生産行程の必要から必然的に發生する費用は、使用價値の現實化に不可避的に伴ふやむなき費用であるから、それは價値形成に參加し、それだけ價値を增大せしめるが、これに反し價値形態轉化〔賣買〕の必要から發生する費用は、それが使用價値の增進・實現・保存に全く關係ないから、それは價値形成機能をもたず、從つて既に生産された價値、こゝでは養蠶農家がその産繭のうちに對象化した價値から割きとられねばならない。在庫費用はかゝる二つの異質の項目を含むが、その區別は實際上困難である。[3]

純粹流通費用。商品の價値形態轉化〔賣買〕のためのみに要する費用は、それが生産の本來の目的たる使用價値に關係ないから、それは價値形成に參加せず、從つて養蠶農家がその産繭のうちに對象化した價値から

1) 山田勝次郎；米と繭の經濟構造〔昭和17年〕. 123—144頁.
2) 以下の敍述については日本學術振興會；米穀流通費用の研究〔昭和11年〕. 34—53頁參照。
3) 山田勝次郎；前揭書. 76—7頁は，在庫費用が一率に價値形成に參加しないと

割きとられねばならならい。

金利諸掛り。金利諸掛りが價値形成機能をもたず、生産過程で創造された價値の分け前であることは、すべての學説の一致して認めるところである。

かくして、現實の乾繭價格決定機構は繭の流通費用に對して一率に價値形成機能を賦與してゐるが、然し科學的には價値形成機能をもつ流通費用と價値形成に參與せずして、すでに生産された價値の分け前にあづかる流通費用がある。

そこで、價値形成に參與しない流通費用〔在庫費用の一部・純粋流通費用・金利諸掛り〕を「流通費用一」とし、價値形成に參與する流通費用〔輸送費用・在庫費用の一部〕を「流通費用二」とすれば、繭價は　養蠶農家の創造した價値（＝繭生産費＋養蠶農家の收益＋流通費用Ⅰ）＋流通費用Ⅱ　として表示され、絲價は　繭價＋製絲家の創造した價値（＝生絲生産費＋製絲家の平均利潤＋流通費用Ⅰ）＋流通費用Ⅱ　として表示される。換言すれば、「流通費用一」は養蠶農家または製絲家の創造した價値の分解され、從つてそれから控除さるべきものとし表はされ、「流通費用二」はそれに加算さるべきものとして表はされねばならない。上掲した數式は繭價または絲價のたえざる動搖を通じて自己を貫徹する本質であり、前掲「掛目」算定數式は上掲兩樣式の倒錯された一時的便宜的な現象形態である。

ところで、かゝる繭價および絲價の決定機構は世界生絲市場を殆んど獨占してゐる日本の場合に妥當するのであつて、支那の場合にはそのまゝは妥當しない。絲價は生絲生産〔繭生産を含む〕に要した價値形成に參與する費用とは獨立にわが國のそれによつて決定され、從つて絲價は支那にとつては文字通り與へられたものにすぎない。尤も價値形成に參與する費用とは平均的な生産條件のもとにおける費用を意味する限り、これは價値形成理論から背反するものではない。然し、かく絲價が價値形成理論から背反するものでないにしても、現在の支配關係のもとでは、次の如き價値形成理論からの背反が生ずる。支那蠶絲業の低生産性から生

關じてゐる。

ずる生絲の生産費、および價値形成に參與する流通費用の割高が平均的な生産條件のもとにおける費用に照して減價されないで相當の利潤を伴ふとすれば、價値形成視點からする過大評價分は繭に含まれる價値から移轉されねばならず、それだけ繭價はその價値より低く評價される。さらに、價値形成に參與しない生絲の流通費用がその生産過程および流通過程に創造された價値から上掲諸費用およびそれに伴ふ利潤を控除した殘餘を越える場合、繭價はさらに過少評價される。そこで、かく過少評價される繭價において、繭の流通費用がいかなる割合と地位をしめてゐるか、その檢討がこゝでの主題である。

二　繭の流通機構

わたしはこゝで揚子江三角地帶に位置する江蘇・浙江・安徽三省の産繭にして器械製絲業の原料繭として中央市場に出廻る乾繭の流通費用を取扱ほうとするのであるが、それにさきだつて、繭の流通機構の概略をあきらかにしてをかねばならない。

支那では養蠶農家のすべての産繭が販賣されるのでなくて、そのかなりの部分は養蠶農家の手許で繰絲されて土絲〔座繰絲〕として販賣される。この兩者の割合については色々の推計が行はれてゐるが、こゝで利用する資料の著者杜修昌氏は、民國二三年〔昭和九年〕における繭販賣と土絲原料繭の割合をそれぞれ江蘇省では七五％〔生繭販賣六〇％零烘(自家乾繭)一五％〕二五％、浙江省では三五％六五％と推計してをり[4]、土絲原料繭として保留される割合のかなりたかいことを示してゐるが、この販賣繭は揚子江三角地帶では專ら器械製絲業の原料繭となる。

揚子江三角地帶における器械製絲業はほとんど上海と無錫に集中されてゐる。そこで、養蠶農家の販賣繭はほとんど上海と無錫に集まるわけであるが、それがどこからられだけ集まるかは、推計の異るに從つて異る。いまかりに國際貿易局編『中國實業誌江蘇省』〔民國二二年〕の推計を借用すれば、上海の器械製絲業の消

4)　杜修昌；京滬・滬杭沿線に於ける米穀・絲繭・棉花の販賣費調査〔編譯彙報第58編．原著民國24年〕．24頁。

費する乾繭二五三、〇〇〇担は浙江省から最も多く供給され、江蘇省これにつぎ、湖北、安徽兩省からの供給は極めて少い。浙江省から上海の器械製絲業に供給される乾繭は嘉興繭二二%杭州繭一九%湖州繭一七%紹興繭一一%海寧繭六%平湖三繭%その他の繭二〇%の割合を示し、無錫の器械製絲業の消費する乾繭一四〇、〇〇〇擔はその略々三分の一にあたる五〇、〇〇〇擔が無錫縣内で調達され、殘餘もほとんど近縣から供給される。[5] これらの地方から上海・無錫に供給される乾繭は、たとへ鐵道沿線の地方から供給されるものであつても、水路の帆船による方が運輸費用やすく運輸速度はやく運輸手續簡單なため、專ら水路の帆船によつて運ばれる。たとへば、民國二三年〔昭和九年〕海杭線と蘇嘉線との交錯する鐵道の要衝たる嘉興から上海に運ばれる乾繭約二七、三〇〇包〔一包は市秤四八斤〕のうち、水路の帆船によるもの二七、〇〇〇包、鐵道によるもの三〇〇包であり、前者が九九%をしめてゐる。[6] そこで、以下の分析では嘉興・上海間および江陰・無錫間の水路の帆船による乾繭の流通費用が代表的なものとしてわれ〳〵の利用する資料のうちから選ばれる。

揚子江三角地帶では、養蠶農家からの產繭購入は特許商たる繭行を通じて行はれねばならない。繭行は養蠶農家から產繭を購入し、繭行の設備する乾繭設備で乾繭する特權をもつてゐる。ところで、繭行のこの設備を利用するものは、多くの場合繭行所有者ではなくして製絲家または余繭商〔繭商人〕であり、繭行所有者は製絲家または余繭商に繭行の設備を貸與し、または買入・乾繭・運送を請負ふにすぎず、自らの計算で繭購入にあたることは少い。さらに、かゝる形態で繭行を利用する者は、さきに述べた如く、製絲家または余繭商であるが、支那ではわが國と異り製絲家が繭行を利用して產地買付する割合は比較的少くして原料繭の四〇—五〇%にすぎず、多くは余繭商が繭行を利用して產地買付して、それを上海・無錫の乾繭市場に放出する。[7] 世界恐慌後の民國二一年〔昭和七年〕には、繭行

5) 國際貿易局編；中國實業誌〔民國22年〕. 第8編119—120頁。たとへば Shanghai Silk Filatures〔Chinese Economic Journal. Vol. III. 1928〕. p. 599 はこれとかなり異つた數字を掲げてゐる。
6) 杜修昌；前掲書. 44—50頁。

の一〇—二〇%が製絲家、二〇—三〇%が余繭商に利用され、殘余は閉鎖されたと稱されてをり、[8] 余繭商の利用が製絲家の利用より遙かに多いことを示してゐる。かくして、繭の流通は養蠶農家—〔鮮繭〕—繭行—〔乾繭〕—余繭商—製絲家の經路を代表的な經路とし、流通費用は專ら繭行と余繭商との要した費用と利潤として把握される。以下の分析ではこの流通經路における流通費用がわれ〳〵の利用する資料のうちから選ばれる。

三　繭の流通費用の分析

われ〳〵はこれだけのことを前置きして、繭の流通費用の具體的分析に這入ることゝする。われ〳〵がこゝで利用する資料は、舊國民政府實業部中央農業實驗所が刊行した杜修昌『京滬滬杭沿線米穀絲繭棉花販賣之費調查』〔中央農業實驗所特刊第九號　民國二四年六月〕であり、それは著者が民國二三年〔昭和九年〕京滬線・滬杭線沿線の主要農產物たる米穀・絲繭・棉花の流通費用をその主要經路に從つて實地に調査したものであり、繭の流通費用に關する限り、殆んど信賴しうる唯一の資料であると思はれる。

そこで、この資料のうちから、養蠶農家—繭行—余繭商—製絲家の流通經路を辿り帆船によつて嘉興から上海および江陰から無錫へ運ばれる繭の流通費用を摘出し、それをさきに規定した流通費用の項目に從つて整序することゝする。

表の示すところに從へば、かう云ふことが云へる。上海における嘉興繭の乾繭價格のうち、流通費用は二九・五%をしめ、養蠶農家の繭販賣手取金たる鮮繭買入價格は僅か七〇・五%にすぎない。假りに輸送費用および在庫費用の全部が價値形成に參與する費用と假定すれば、兩者の合計一二・八%は本來養蠶農家の創造した價値でなく、養蠶農家の產繭販賣からそれが上海へ達するまでに附加された價値であるから、その大小は養蠶農家の繭販賣手取金に影響しないやうに見えるが、然しこれらの費用の價値形成作用はその社會的

7) 蠶絲業組合中央會編；支那蠶絲業大觀〔昭和4年〕. 162—163頁。
8) D. K. Lien: The Silk Industry of China. 1940. p. 104.

	嘉興—上海			江陰—無錫
	改良種	土種	平均（百分率）	改良種（百分率）
鮮繭買入價格	六四・八〇〇〇元	五四・〇〇〇〇元	五九・四〇〇〇元（七〇・五%）	八〇・〇〇〇〇元（九八・〇%）
輸送費用	〇・七三四一	〇・七三四一	〇・七三四一（〇・八）	〇・三六〇〇（〇・四）
船賃	〇・四七五〇	〇・四七五〇	〇・四七五〇	〇・三〇〇〇
積卸費	—	—	—	〇・〇六〇〇
解賃	—	—	—	—
運送保險料	〇・二五九二	〇・二五九二	〇・二五九二	—
在庫費用	一〇・二〇〇〇	一〇・二〇〇〇	一〇・二〇〇〇（一二・〇）	一一・五〇〇〇（一一・五）
乾繭費	一〇・〇〇〇〇	一〇・〇〇〇〇	一〇・〇〇〇〇	一一・〇〇〇〇
包裝費	—	—	—	〇・五〇〇〇
保管費	〇・二〇〇〇	〇・二〇〇〇	〇・二〇〇〇	—
純粹流通費用	一一・三六一二	一二・六八一二	一二・〇七一一（一四・三）	（一）五・四一〇〇（一）五・四
運送會社手續費	〇・〇三五〇	〇・〇三五〇	〇・〇三五〇	—
捐客佣金	—	—	—	〇・五〇〇〇
余繭商利潤	一一・三三六二	一二・七五六二	一二・〇四六二	（一）五・九一〇〇（三・五）
金利諸掛り	三・九〇四六	一・六四六	一・四四六（二・四）	三・五九〇〇
改良指導費	一・六二〇〇	—	〇・八一〇〇	三・〇〇〇〇
慈善・教育・商會	〇・三八四六	〇・二八四六	〇・三三四六	〇・五五〇〇
公安・公會・印紙	〇・九〇〇〇	〇・九〇〇〇	〇・九〇〇〇	—
雜費	〇・九〇〇〇	〇・九〇〇〇	〇・九〇〇〇	—
合計	二五・〇〇〇〇	二五・〇〇〇〇	二五・〇〇〇〇（二九・五）	一〇・〇〇〇〇（一〇・〇）
乾繭價格（總計）	九〇・〇〇〇〇	七九・九〇〇〇	八四・四五〇〇（一〇〇・〇）	一〇〇・〇〇〇〇（一〇〇・〇）

備考

一、杜修昌『京滬・滬杭沿線に於ける米穀・絲繭・棉花の販賣費調査』（編譯彙編第五十八編）二五—二八頁の第七表から計出する。「乾繭費」は包烘費、從つて繭行の利潤を含む。江陰—無錫は異例である。この場合における流通費用の「合計」の低位は、「余繭商利潤」のマイナスに基くが、杜修昌氏の調査した一一事例のうち「余繭商利潤」の計出しうる六事例の平均は略々八%になつてゐる（杜修昌・前掲書四三—四四頁）。

二、上掲表に類するものをわが國について計算すれば次の如し。(a)昭和九年における春白繭の生繭百匁當り生絲量一二・四二匁および同年におけるその平均價格一貫當り二・五七圓（日本中央蠶絲會・蠶絲年鑑昭和一〇年版四二頁および五九頁）から、生絲百斤の生產のために要する繭代金は三五四・〇七圓となる。(b)昭和九年における生絲百斤生產のために製絲家の要した委託乾繭費三・二五圓、購繭（供繭受入）手數料三・九二圓（農林省蠶絲局・全國器械製絲工場調昭和九年度三三頁）であり、これが上掲表における流通費用にあたる。(c)そこで、生絲百斤生產のために製絲家が乾繭のため支拂つた價格は(a)の三五四・〇七圓(b)の七・一七圓との和たる三六一・二四圓となり從つて流通費用(b)のこれに對する割合は一・九%になる。嘉興—上海の二九・五%と對比せよ。

平均値の範圍に限られ、それを越えてなほその存在を主張すれば、その過大評價分だけは養蠶農家の創造した價値から移轉されねばならず、繭販賣代金を押し下げる可能性がある。例へば、上表の乾繭費と備考二の乾繭費とを對比せよ。純粹流通費用および金利諸掛りは、これとは反對に養蠶農家の創造した價値からの控除分であるからこれは直接に繭販賣手取金に影響するのであるが、これが一六・七%をしめ、とくに余繭商利潤が略々一四%をしめる。備考二の糸繭費と對比すれば、この數字のもつ意味は明瞭である。

江陰—無錫の流通費用について、もし余繭商利潤が普通であれば、同じことが云へるであらう。

四　總　括

絲價は支那にとつてその生産過程および流通過程に要した費用とは獨立にわが國の絲價によつてあたへられるが、價値を形成する費用が社會的費用である限り、この絲價のうちにも價値形成理論が貫かれてゐる。ところで、生絲の生産過程および流通過程における割高な費用がすべて乾繭價格に轉稼され、從つて乾繭價格はそこに含まれる價値より遙かに過少評價されることになる。かく過少評價された乾繭價格のうちにしめる繭の流通費用、それがこゝでの主題であつた。

支那における繭の流通費用は、わが國の二%に對し三〇%に及び、極めて高い割合をしめしてゐる。ところで、これらの全部が養蠶農家の創造した價値から移譲されるものでなく、控除分は價値形成に參與しない流通費用〔在庫費用の一部・純粹流通費用・金利諸掛り〕であつて、價値を形成する流通費用〔輸送費用・在庫費用の一部〕は養蠶農家の創造した價値に價値を加へて乾繭價格をたかめる。

支那における價値を形成する繭の流通費用は一二・八%に達し、從つてわが國より遙かにたかいわけであるが、わが國よりの超過分だけは價値を形成せず、養蠶農家の創造した價値から控除されねばならない。價値形成に參與しないで本來養蠶農家の創造した價値か

ら控除さるべき繭の流通費用は一六・七％といふたかい比率に達し、その大部分は余繭商利潤によつてしめられてゐる。

かゝる經路を辿つて、養蠶農家の繭販賣手取金は押し下げられ、逆に養蠶業の低生産性、從つて繭生産費の制高と相俟つて、養蠶家の收益を減少せしめる。これこそわが國蠶絲業の發展に對する支那蠶絲業の相對的停滯の基柢の一つである。舊國民政府が蠶絲業對策の一としてとりあげた合作社運動は、一方において合作社を模範蠶桑區・改良蠶桑區と結合せしめて養蠶業の低生産性を克服し、他方に合作社による繭の共同販賣によつて價値形成に參與しない流通費用とくに余繭商利潤の奪回をはかつたのである。然し、これが正しい方向であるにしても、それによつて養蠶農家がその正當な價値を實現することから遙かに遠いことは、上述したところから明瞭であらう。